

年間 300~400例 7割ちょっと単輸入例 日本には常在菌でない。

◎ 赤痢菌 Shigella (1999 年食中毒の起炎菌に追加された)

赤痢菌属 Genus Shigella と分類されているが、DNA hybridization より、大腸菌とほぼ同一であり、大腸菌の一種と考えられている。

菌は 4 種 ^{志賀菌が 4 群}

S. dysenteriae A 重症例多い ← 日本には少ない。

S. flexneri B

S. boydii C

S. sonnei D 軽症例多い ← 日本で見たるものの 7~9割

細菌性赤痢は菌が大腸粘膜細胞内に侵入、増殖して起こる〔ヒト膜〕性炎症である。

通常菌血症は起こさない。

〔病態〕

赤痢菌の自然宿主は ヒト と サル である。〔胃酸〕に抵抗性であるので、少ない菌数 (10~200 個) で感染する。→ ヒト-ヒト感染あり。

1-3 日の潜伏期の後、発熱、水溶性下痢で発症し、発熱は 1~2 日で解熱、続いて腹痛、しぶり腹 tenesmus、粘血便となる。 ^{このとき、小腸で増殖}

残便感
繰り返す腹痛と便意

〔治療〕

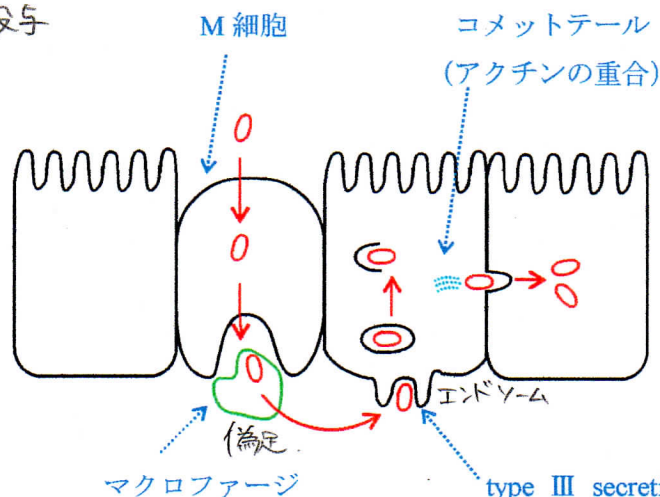
赤痢菌は少ない菌量で感染が成立するため、保菌者も含めて抗菌薬療法の絶対的適応となる。

第 1 選択 ニューキノロン剤 (大人)

ニューキノロン剤は DNA 合成阻害剤なので、子ども 絶対使わない。
色々と使う

第 2 選択 ホスホマイシン (子ども)

↓
5日間投与



感染者の半数は

20~30代

→ 輸入感染症だから